17) ＰＭＤの口腔清掃状況

広島大学歯学部補綴
浜田泰三　佐々木郁子
今田和秀　山田早苗
国立療養所原病院
河野七郎　和田正士
生冨和夫　弁田慶三
平木康彦

＜緒　言＞

*ＰＭＤ*の口腔衛生改善を目的として、どのような口腔清掃法が適しているか調査を行なった。

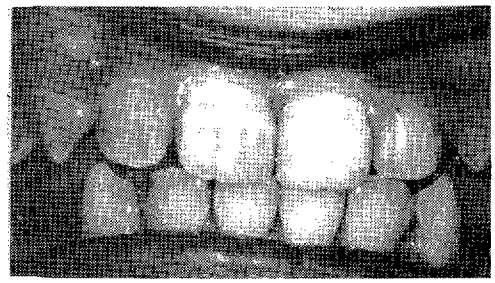
＜調査対象及び方法＞

男子*Duchenne*型*ＰＭＤ*（年令８才～13才）13名を対象とした。方法として(1)硬い毛の歯ブラシ（わかば１号）を用いローリング法（３名）、(2)軟い毛の歯ブラシ（*ＰＨＢ*）を用いフォーンズ法（３名）、(3)偏心運動の電動歯ブラシ（パールライン）（３名）、(4)水流圧洗浄器（ウォーターピック）（１名）以上４種の異なった口腔清掃法で事前に指導を行ない４週間、朝夕２回の口腔清掃を行なわせた。対照として*ＰＭＤ*自身が日常行なっているブラッシング法によるものも観察した（３名）。観察は歯石除去、歯面研磨後１週間間隔で行った。観察部位は上下顎前歯部とし、歯垢沈着量ははエリスロシン錠剤による歯垢染色を行ない、観察前の口腔衛生状態との比較を行なった。歯垢量判定は*O*、*H*、*I*、の*Debris Index*　を基準とした。

＜結果及び考察＞

今回対象とした*ＰＭＤ*の厚生省筋ジス研究班の分類による機能障害度内訳は（Ⅰ－１）３名、（Ⅰ－２）１名、（Ⅰ－３）１名、（Ⅰ－５）２名、（Ⅱ－６）３名、（Ⅱ－７）１名、（不明）２名である。１週間ごとの観察記録の平均は図１に示すとおりである。観察前の各個人の歯垢沈着量を、それぞれ１に、歯科衛生士による歯石除去、歯面研磨後の歯垢沈着量を０に換算した点数表示を行ない観察を開始した。(1)ローリング法：１週間目は歯垢沈着量が最も少く、清掃効果は良好であった。しかし、２週間目は最も多い歯垢沈着量を示した。ローリング法の習得にかなりの時間がかかるためと思われる。(2)フォ

（写真１）観察前の口腔衛生状態（図１の点数１の状態）



（写真２）ローリング法指導後４週間目の口腔衛生状態）

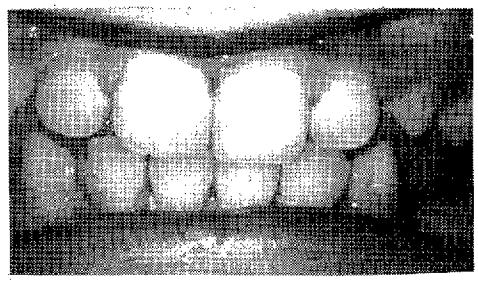


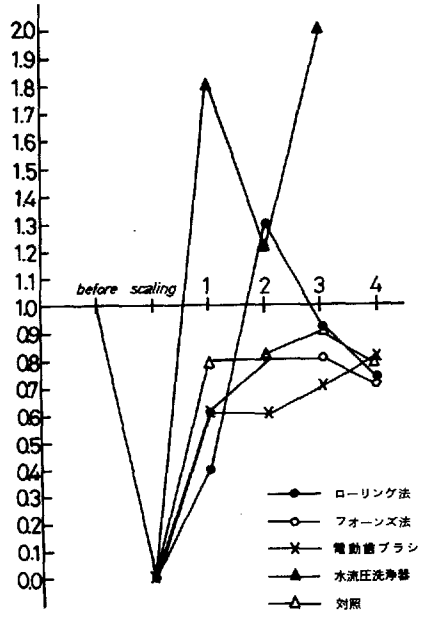
図1

縦　　軸：歯垢沈着量

横　　軸：観察期間（週）

before　：観察前

scaling：歯科衛生士による歯石除去、歯面研磨



ーンス法：歯垢沈着量は3週間目まで少い方から2番目の効果を示し、4週間目が最も少なく清掃効果は安定していた。フォーンズ法の習得が比較的容易なためと思われる。(3)電動歯ブラシ：清掃効果は比較的安定しているが、経週的に増加の傾向が認められた。器具の重量がかなりあるため握力、暁の力などを考慮すると操作が困難と思われる。(4)水流圧洗浄器：歯垢沈着量の増加が著しい。あくまでも補助的なものと思われる。(5)*PMD*自身がこれまで行なってきている清掃法もかなりの効果がかることがわかった。

以上4週間の観察により①水流圧洗浄器以外の歯ブラシを用いる清掃法では、口腔衛生状態は、観察前より改善された（写真1、2）。②どの方法も歯科衛生士が行なった歯垢沈着量0の状態を維持できなかった。③フォーンズ法は習得がはやく、ローリング法は遅く、習得化が困難であると推察される。今回の調査より、口腔清掃法に関する長期指導を行ないながら、*PMD*自身の口腔衛生に対する意識の向上をはかり積極的に口腔清掃を行なう姿勢、環境をつくっていくことが重要と考えられる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<緒言>

PMD の口腔衛生改善を目的として、どのような口腔清掃法が適しているか調査を行なった。